生徒の「見方や考え方」を生かし・鍛える、「故郷」の実践
―「学び合い」を意図した授業の創造―

岐阜県恵那市立上矢作中学校
山田　高秀

「不易」と「流行」の調和

「故郷」。魯迅・竹内好訳。一九二一年発表の不朽の名作―。この作品が教科書教材として採り上げられるようになって、何年経つのだろう。

そんな「不易」なる作品に、近年襲いかかった「時代の波」といえば、「詳細な読解に偏りがちであった授業を―」といった、「読み取り・読み深め」の授業に対する、やや批判的なニュアンスを帯びた「言語活動の多様化」や、「つけたい力の明確化」・「単元・単位時間の評価規準の明確化」という「波」ではなかっただろうか。ここでは、こうした「波」（特に後者）に私自身がどう対処して、不易（諸先輩方のご実践）と流行（時代の要請）の調和を図ったのかを綴りたいと思う。

単元を通して育てたい「見方・考え方」

単位時間に、生徒の多様な見方や考え方を基にした「学び合い」のある授業を成立させるためには、単元を通して育てたい「見方や考え方」を、授業者が一貫してもたなければならないと考える。そこで、本単元において身につけさせたい「見方や考え方」を、次のように設定した。

●人物の状況や心情を、「状況の変化」を示す表現に着目し、作者の表現意図を踏まえながら見出そうとする見方や考え方

これを軸にして、生徒が各場面を学習する際に、どのような「状況の変化を示す表現」に着目するのか、或いは、着目した表現に対して、どの人物の視点を足場にしたアプローチをするのかなどを事前に予想し、単位時間の「学び合い」のあり方を構想するのである。また、そうした「学び合い」のある授業の中で、螺旋的・反復的に「見方や考え方」を鍛えられてこそ、生徒には、

◎書き手の思考や心情に迫り、自分の考えを構築する力

がつくと考えた。

なお、**単元の評価規準**は次の通りである。

【関心・意欲・態度】

●「状況に生きる人間の姿」をとらえようと表現の仕方や文章の特徴に注意しながら、進んで作品を読もうとする。（C―ウ）

【読むこと】

●風景や人物の巧みな描写とその変化が、人物を取り巻く状況の変化や心情の変化の比喩となっていることを理解し、書き手の「表現意図」をみぬくことができる。（C―ウ）

●「人間、社会」について考え、自分の意見をもつことができる。（C―エ）

【言語に対する知識・理解・技能】

●抽象的な概念などを表す多様な文章表現に着目して文章を読み進め、語感を磨き、語彙を豊かにする。（言語(1)―ウ）

さらに、単元の始めには、生徒の意識を連続させるために「初発の感想」を交流し、それを基にして、「単元を貫く課題」を設定した。

◎「わたし」の「故郷」に対する思いの変化を読み深めよう。

「思いの変化」を、「状況の変化を示す表現」に着目させながら、「わたし」の目線で読み取ろうとする生徒と客体視する生徒の、大きな二つの流れを生む意図がこの課題にはある。

そして、この二つの流れを行き交いながら生徒は、「一人の人間として、状況をどうきり拓き、生きるか」について「自らの考え」を巡らせるようになるのである。

「学び合い」を意図的に組織する

ここでは、本作品中、最も読み応えのある、「だんな様！……」を含む、第五場面を例にして、単位時間にどのような「学び合い」を意図したのかを簡単に述べたい。

【本時のねらい】

「状況や人物の外見の変化」に、異なる人物の視点から着目し、それら細かな描写の積み重ねが、「閏土（ルントー）」と心を通わせることができなくなった「わたし」の深い悲しみをより効果的に表していることが分かり、二人の間を隔てている「壁」が、「閏土」自身の変化のみならず、「わたし」自身の変化によってもたらされてしまったのだということを読み取ることができる。

したがって、**この時間の規準**（B）は、「『唇が動いたが、～』→『はっきりこう言った』などの『人物の心情の変化を示す表現』に着目し、その意図と効果を理解すると共に、『わたし』の『故郷』に対する失望を読み取っている。」となる。

授業の冒頭では、この場面にいる「わたし」の「姿」＝「故郷に対する思いの変化」を生徒に問い、本時の課題化を図る。

◎「悲しむべき厚い壁」を感じてしまう、「わたし」の思いの変化を読み深めよう。

この後、一人読みをさせ、意見交流に入るのだが、この際に大切にしたいことが、「子どもづかみの観点を、教師が事前にもっていること」である。これがなければ、「学び合い」は成立しない。本時は、

●「閏土」の変容に着目して、「わたし」の心情を思い描く生徒
●「わたし」の変容に着目して、「閏土」の心情を思い描く生徒

の二つの観点から、子どもづかみを行い、意図的指名によって、両者の「見方・考え方」を学び合わせた。また、もう一つ大切にしたいのが、**「問い返し」**の吟味である。

先に示した観点のうち、後者の立場から読みを深める生徒は少ない。そこで、「あれほど再会を楽しみにしていた『閏土』であったのに、なぜこのような返事をしてしまったのだろうか。」という問い返しを事前に用意しておいた。この発問は、異なる人物の視点から、登場人物の心情を見出そうとする「見方・考え方」（着目の仕方）への転換を意図するものである。こうして「学び合い」を深め、

●「『わたし』自身の態度も以前とは違う。そういう『わたし』の対応の『変化』が、『閏土』の『返答』を生み出してしまったのかもしれない。『わたし』はそのことに気づかないまま、『故郷』への絶望を深めているのだ。」

という読みが導き出されるのである。

最後に―。「故郷」は今も私に、生徒のもつ「言葉に対する豊かな感性」を示し続け、新たな出会いの喜びに打ち震えさせてくれる作品であることを報告する。

やまだ　たかひで　岐阜市立長良中学校を経て、現勤務校（三年目）に。岐阜県教育研究会・中学校国語教育研究会・研究部総括。